**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第５１回　（２０１９年０１月１５日）**

**・第５１回の勉強範囲：「第二章　信者たちとともに」２６、２７頁**

神様を愛することはチャレンジのようだ、という話をしました。われわれは目に見えるもの、例えば親戚、動物、モノなどは容易に愛することができます。しかし、認識できていないものを愛することは、イメージがわかないので難しいです。神様の絵はありますが、想像上の姿です。その絵だけを見て愛することはちょっと難しい。なぜなら、われわれには「神様の絵を見ただけで神様を好きになる」たぐいのサムスカーラがないからです。

映画は、本当は光と影の組み合わせでできているにもかかわらず、われわれは映画の中のヒロインを好きになることがよくあります。なぜならわれわれには、「世俗的な美しいものが好き」というサムスカーラがあるからです。

中には「神様の写真を見て神様を好きになる」ようなサムスカーラを持っている人もいます。例えば、ラーダーはクリシュナと実際に会う前に、クリシュナの絵を見てとても好きになりました。しかし、ラーダーのようなサムスカーラを持つ人はまれです。世俗的なサムスカーラを持つ人が多いので、その人たちのために神様の愛を深める方法を補足説明します。

1. **神様への愛を深める方法（補足）**
2. **神の化身**

**・われわれが愛せるように人間の姿となってあらわれる**

イエス、お釈迦様、シュリー・ラーマクリシュナなどの神の化身は、本当に人間の姿でこの世に存在し、教えていました。生涯の記録も残っています。このように神様が実際に生きた人間として目の前にあらわれると、われわれは神様を愛することが容易になりませんか？

われわれは人間の姿であらわれた神の化身を実際に見て、教えを聞き、読み、その生涯について知ることで、神を好きになる可能性があるでしょ。

これが神の化身がこの世にあらわれる理由です。

われわれは有限なので、無限で永遠なものを愛することは難しいです。なぜなら「無限」を想像することが難しいからです。想像ができないと、愛することも難しい。しかし、われわれは人間なので、ほかの人間と自分を同一視することは簡単です。だから神様はわれわれのために人間の姿で、あらわれてくださるのです。もし神様が人間ではなく他の生き物を導こうと思ったら、その生き物の姿であらわれないと、コミュニケーションがとれません。だから、スワーミージーは、「バッファローのためにはバッファローの姿をした神様が必要だ」と言いました。神様は何でもできるので、どんな形であらわれることもできます。そしてわれわれのためには人間の形であらわれます。

**・神の化身のことを深く知ると愛さずにはいられなくなる**

神様を愛することは大きなチャレンジです。しかし、ひとたび神様を愛しますと、神様をお世話することは大変ではなくなります。母が子の面倒を自然とするように、愛した人をお世話することは大変なことではないからです。神様を愛すると、そこから本当の霊的な生活は始まります。しかし、われわれには世俗的な愛のサムスカーラはありますが、神への愛のサムスカーラがないことが多いので神様を愛することはとても難しいです。

神への愛のサムスカーラがないのに、どうやって神様を一番愛することができるのでしょうか？　たとえサムスカーラがなくても、神を愛することは無理ではありません。その一つの方法が、神の化身です。神の化身のことを深く知る。例えば、神の化身であるシュリー・ラーマクリシュナが何を話していたか、どのようにみんなとコミュニケーションをとっていたか、どんなジョークで笑わせたか、どんな例を使って霊的なことを説明したか。　それらを『福音』を読み、シンプルで純粋な子供のような人となりを知ると、シュリー・ラーマクリシュナを愛さないほうが難しいくらいです。それほどの魅力をさまざまなエピソードを通して知ることができます。

**・神を愛すると霊的生活が楽しくなる**

そしてもし神様を愛することができたら、霊的な生活がだんだんと面白くなってきます。神様を愛する前は、ジャパや瞑想は単調で骨が折れる退屈なつとめだと感じますが、いったん神様を好きになると、どれくらい瞑想やジャパが面白いものかがよくわかります。

1. **毎日の祈りや聖典の勉強**

・神に祈る

・神様について聖典で勉強する

・神の化身の生涯を読む

・神の名前を唱える

これらのことを毎日毎日していると、だんだんと神様が好きになってきます。結婚生活のことを考えてください。最初から相手のことが好きだったわけではないはずです。だんだんと愛を増やしますね。友達同士も同じことです。愛はだんだんと進展していくものです。神への愛も同じことです。最初からとても好きになることはできません。

**神様をどれくらい深く愛さなければいけないか**

**（バララーム・ボシュの例）**

バララーム・ボシュという在家のとても偉大なシュリー・ラーマクリシュナの弟子がいました。シュリー・ラーマクリシュナに初めてお目にかかった時に彼は、「私はこんなに神様に祈っているのに神様にお会いできないのはなぜでしょうか？」と尋ねました。シュリー・ラーマクリシュナの答えは、「あなたは本当に神様のことをあなたの子供と同じくらい、いとしい存在だと考えていますか」でした。☞（『不滅の言葉２０１３No.４』頁１０下段１１~１７参照）

**・📖読み『福音』２６頁下段L４～１０**

*高徳の人達との交わりからはもう一つの利益を得られる。それは、実在と非実在とを認識する力を育てる。神だけが実在、つまり不滅の実体であって、この世界は非実在、つまり移り変わるものである。人は自分の心が非実在のもののほうにさまようのに気づくと同時に、識別力を使わなければいけない。ゾウが隣人の庭のバナナの木を食べようと鼻をのばした瞬間に、それはゾウ使いの鉄の突き棒の一撃をくらうのだ」*

（解説）

**実在と非実在を識別する**

サドゥは実在である神のことをいつもたくさん考えています。そのサドゥの姿を見て影響を受け、信者はやる気が出ます。

例えば、サドゥはいつも識別しています。なにが実在（サット）で、なにが非実在（アサット、アニッテャ）かを。そのことをまねてわれわれも識別することができます。

実在は永遠で、非実在は一時的です。われわれには世俗的なサムスカーラがあるので、ひとりでに非実在のものに心惹かれます。そのときに識別をして「これは非実在なので、惹かれるのはよくない」と考えて抑制します。感覚、心が世俗的なものに向くのを抑制し、引き戻すのです。　注意してほしいのは、「一時的」という言葉は「１時間」「１日」程度だけを指すのではなく、「５０年」「１００年」などとても長い時間も指すということです。

**人間の良心が識別する**

本文の象の例について考えてみてください。象は、実在と非実在を識別することができません。ほかの生き物もそのような識別はできません。実在と非実在、道徳的か非道徳的かを識別できるのは、人間の特徴です。人間の良心（conscience）、知性（ブッディ）が、道徳的かどうか、もっと高いレベルでいうと、実在か非実在か、を識別します。知性の源は魂、アートマンです。知性も本当は物質です。知性はいつも純粋なアートマンを鏡のように反射し、なにが不純かを識別します。アートマンは神です。神様がわれわれの中にアートマンとして存在しています。そして有名なアイデアがあります。

　Conscience is the voice of God. 　良心とは神の声です

もしわれわれすべての中に神がおられ、良心が神の声なのであれば、犯罪者の中にも良心があるはずです。それなのになぜ彼らは罪を犯すのか？という疑問が出ますね。もちろん犯罪者の中にも絶対にアートマンがあり、良心もあります。しかしそれらはあらわれていないのです。

タクールは「金に土をたくさんまぶすと、金は見えない。しかし金は絶対そこにあります。土を水で洗い流すと、金があらわれるのだ」と言いました。われわれの中にアートマンは絶対にあります。しかしあらわれていない。だから、「非実在のものを好きになったらそこから引き戻す」という識別が大事です。

**・📖読み『福音』２６頁下段L１１**

*一隣人「なぜ人は罪深い傾向を持っているのですか」*

(解説)

1. **ギーターのシュリー・クリシュナの答え**

バガヴァッド・ギーター　第3章36節

*アルジュナが問います。「おお、ヴリシュニ族の子孫であるクリシュナ様！　人は自分の意思に反し、つい罪深い行動をとってしまうことがありますが、これはいったい何の力によるものでしょうか？」と。*

『福音』の本文とギーターとは全く同じ質問ですね。これに関してインド大使館でのバガヴァッド・ギーターの講義で長く説明しました。

その質問の答えは、欲望（カーマ）と怒り（クローダ）でしたね。

そして怒りと欲望の原因はラジャ・グナです。プラクリティには、サットワ、ラジャス、タマスという性質があります。一般的な人にはラジャスが多いです。欲望も大きい、怒りも大きい。

欲望と怒りは、感覚、心、知性に住んでいます。欲望と怒りがわれわれの知識を覆っています。欲望と怒りの結果、ギャーナ**\***とヴィッギャーナ**\***を失う可能性があります。例えば、聖典から得た知識、さまざまな霊的な実践を通して得た知識、の両方を失う可能性があるのです。

**\***ギャーナ：推理と識別によって得た神の知識

**\***ヴィッギャーナ：絶対者の特別の知識（悟り、自覚）

**・📖読み『福音』２６頁下段L１２～１５**

*師「神の創造にはあらゆる種類のものがある。彼は、良い人びとと同じように悪い人びともおつくりになった。われわれに善い傾向をお与えになるのは彼である。そしてまた、われわれに悪い傾向をお与えになるのも彼である」*

（解説）

1. **シュリー・ラーマクリシュナの答え**

「神の創造の中には、良いものと悪いものの両方があります」

・神の創造の中には、なにが良くて何が悪いかを識別する知識もあります。そしてわれわれには、なにを選ぶかの選択権が与えられています。もしわれわれに選択権がなかったら、すべて神様の責任になってしまいますね。だから神様はなにが良くて何が悪いかをわれわれが理解できるように、知性を与えました。それが良心です。われわれは与えられた良心に照らし合わせて、自分でどの道を行くかを選ぶので、責任は自分にあります。

**すべてを神にお任せしている人は決しておちない**

エゴが全部なくなった人は、清らかで、絶対に罪を犯しません。神様にすべてをお任せしているので、神様が手を引いて導いてくださいます。

二人の子供がいます。

一人の子供はエゴがないので、神様に手を引かれています。その子は絶対におちません。

もう一人の子供がいます。エゴがある子供です。その子は自分のエゴを満足させるために神様の手を引っ張ります。その子供はおちる可能性があります。

シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、神の創造の中に全部あります。良いものもあります、悪いものもあります。それをどのように識別するか、（という）知識もあります。

**・📖読み『福音』２６頁下段L１６、１７**

*隣人「そうであれば、私たちは自分の罪ある行いに対して責任がないのではございませんか」*

（解説）

この隣人の質問は皆さんの考えと同じかもしれない。（笑い）

**よい行い・悪い行いの原因は誰か**

・よい行いをした時は「自分がした」と言い、悪いときは神様の責任にする。そのような考え方があります。都合のいいときだけ神様に責任を押し付ける、牝牛を殺したブラーミンの話もあります。☞（『福音』200180410テキストデータ「都合のいいときだけ自分と体を非同一する例」参照）

・もう一つの考え方があります。それは、よい行いの時は「神様のおかげでできました」と言い、悪いときも「本当はこれも神様の願いかもしれない。神様が本当の原因です」と考えることです。

・スワーミージーはそうはしません。

「間違ったときは「自分がしました」と言ってください。自分の責任です。よいとき、成功したときは神様をほめてください。自分の心の問題です」

シュリー・ラーマクリシュナの答えが次にあります。

**・📖読み『福音』２６頁下段L１８～１９**

*師「罪はおのずから結果を生む。これは神の法則だ。チリ（トウガラシの一種）をかめば舌がひりひりしないかね。*

（解説）

**エゴがあるうちはカルマの結果を受け取る**

これもカルマの法則ですね。エゴがあるうちは、カルマの結果を受け取ります。カルマの法則は、エゴがある人のためのものですから。

**悟った人はカルマの結果を受け取らない**

もしエゴがなくなり、悟ると、いかなる仕事の結果でも、その人には何も影響しません。カルマファラー（行為の結果）が出ません。

「だけど、タクールもスワーミージーも怒っていたではないですか？」と思うかもしれません。タクールもスワーミージーも怒っていましたが、それは相手をなおす、という目的がありました。

**悟った人の行為の結果の行く先**

悟った人でもときどき自然に怒る可能性もあります。それでもエゴがないのでその怒りの結果に、カルマの法則は出ません。良いことの結果も悪いことの結果も悟った人には影響しません。しかし、行為の結果は絶対に出ます。だから悟った人が起こした行為の結果は、他の誰かのところに行かなければならないのです。それではどこに行くのでしょうか？

まず、悟った人の良い仕事の結果は、悟った人をお世話する人を助けます。悟った人の悪い仕事お結果は、その人を批判する人のところに行きます。これは面白い説明ですね。

**・📖読み『福音』２６頁下段L１９～２７頁上段Ｌ３**

*モトゥルは、若いときにかなりだらしない生活をした。それだから死ぬ前にさまざまの病気に苦しんだ。*

*人は若いときにはそれに気づかないかもしれない。私は、カーリー寺院の台所のかまどで薪が燃えているときに中をのぞいたことがある。最初は、湿った木はむしろよく燃える。それほど湿気を含んでいるようには見えない。しかし木が十分に燃えると、湿気が全部一方の端に逃げる。ついには、薪から水が噴出して火を消すのだ。*

（解説）

湿った木の水分は、どんどんと木の内側に押し込められていきます。閉じ込められた水分の割合がとても大きくなると、パッチポッチという音が出て水が噴き出し、火を消してしまいます。

今はガスと電気を使うので、木で火をおこした経験が皆さんにはないかもしれません。私が子供のころは、木材を使って料理をしていました。そのとき水分を含んだ木を使うと、煙が出て大変でした。私は子供のころお母さんに「私がこんなに大変な思いで料理をしているのだから、あなたはちゃんと勉強しなさい」と言われたほど、大変なことだったのです。

スワーミージーは「料理はガスを使わずに、ゆっくり燃える木材が一番いい」と言っていました。皆さんも料理をするときは、小さい火で作ったほうがいいです。そのほうがよく煮えて健康のために良いのです。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ４、５**

*それだから、人は怒りや情欲やどん欲には気をつけなければいけない。*

（解説）

だから、カルマの結果で後々困らないように、最初から気を付けないといけないのです。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ５～Ｌ８**

*たとえば、ハヌマーンの場合をごらん。腹立ちまぎれに、彼はセイロンを焼いた。ついに、彼はシーターがアショーカの木の林の中に住んでいるのを思い出した。それで、火が彼女を傷つけはしないかと恐れてふるえだした」*

（解説）

これは、ラーマーヤナ叙事詩の話です。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ９**

*隣人「なぜ神は悪い人びとをおつくりになったのですか」*

（解説）

神様は全能なので、良い人だけをつくることもできたはずですね。答えは次にあります。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１０**

*師「それは彼の、彼のお遊びだ。*

（解説）

**神様のリーラー（お遊び）**

**ターイッチャ、ターリーラー：神様の意志、神様のお遊び**

ターイッチャ：　ター＝その方（尊敬語）　イッチャ＝意志

ターリーラー：　ター＝その方、　リーラー＝遊び

神様の意思、神様のお遊び（リーラー）を理解するのは難しいです。　「なぜ神様はそんな遊びがお好きなんだろうか。神様は楽しいかもしれないけれど、われわれは大変な思いをしているのに」と感じ、神様の意思がちょっとわからないですね。イソップ物語の中に、よく似た話があります。

**他者の遊びが自分にとっては大変なことの例**

**（イソップ物語のカエルの話）**

ある日の事、男の子たちが池の近くで遊んでいたのだが、
「あっ、池にカエルの群れがいるぞ。石を投げてやっつけてしまえ！」
と、池のカエルたちに石を投げつけて、その中の何匹かを殺してしまいました。
　すると、カエルたちのリーダーが水の中から顔を出して叫びました。
「止めてくれ！　きみたちには遊びかもしれないが、われわれは死んでしまうほどのことなのだ！（What is play to you is death to us.）」

カエルにとっては、子供たちの遊びが死と結びつくように、われわれにとっては、神様のお遊びは命にかかわるほどのことです。だから信者は神様に文句を言います。なぜ神様はこんなお遊びをなさるのかと。

神のリーラーのアイデアは、とても信心深い人には理解できます。　（Q&A参照）

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１０～１１**

　*彼のマーヤー****\*****の中には、ヴィディヤー****\*****とともにアヴィディヤー****\*****もある。*

（解説）

**知識と無知**

バガヴァッド・ギーターのプラクリティに関する話**\***を思い出してください。３つのグナ、サットワ、ラジャス、タマスの中で、ヴィディヤー・マーヤーはサットワです。アヴィディヤー・マーヤー**\***はラジャス、タマスです。

マーヤーという考えはサーンキヤ哲学には出てきません。のちのヴェーダーンタ哲学になって出てきます。しかしベースは同じです。サットワはヴィディヤー・マーヤーです。すべて神に向けます。アヴィディヤー・マーヤーは怒り、欲望、執着などからなっています。働きすぎ、仕事、などラジャス、タマスを合わせてアヴィディヤーです。

ヴィディヤーの中には、なにがヴィッディヤーでなにがアヴィディヤーか、ということを識別する知識もあります。

**\***マーヤー：霊的な無知。本質（真理）を覆い隠すヴェール。絶対者を相対界とみる宇宙的幻覚。

**\***ヴィディヤー：解脱に導く知識。究極実在へと導く知識。

**\***アヴィディヤー：vidya（知識）に否定の接頭辞aがついたもので、字義は「無知」。究極実在の認識をさまたげる無知。

**\***アヴィディヤー・マーヤー：二元性をもたらすマーヤーは、アヴィディヤー・マーヤーとヴィディヤー・マーヤーの二面を持っている。アヴィディヤー・マーヤーつまり無知のマーヤーは、怒り、欲情などからなり、人を世俗性に巻き込む。ヴィディヤー・マーヤーつまり知識のマーヤーは、親切、純粋さ、

無私の性質などからなり、人を解脱に導く。いずれも相対界に属している。

**\***ギーターのプラクリティ：第３章２６節「あらゆる活動は、人間のによってなされるのだが、自分の心が我執によって曇らされている者は、『すべて私が為しているのだ』と思い込んでしまう。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１１～１３**

*闇もまた必要なのだ。それは光の輝きをいっそうよく現す。怒りや色欲やどん欲が罪悪であるということは明らかだ。*

（解説）

**闇があるから光がありがたい　→　光も闇も両方必要**

すべてが輝いていると、輝きがどれくらい特別なものか理解できません。

・のどの渇きがないと、水の美味しさが実感できません。

・疲れているときの眠りはよいものだが、暇にあかして寝ても心地良さは感じられません。

・働くから休憩が大事に思えます。

・夕刻に太陽が沈み暗くなるから、翌朝の太陽の輝きをうれしく感じます。

・汚い場所があるから、清潔な場所が良いと感じられます。

・罪びとがいるから、聖者がどれほど特別か理解できます。

もしすべてが清潔な場所だと、それが当たり前になります。ずっと太陽が出ていると、それが当たり前になり、陽の光がどれくらい特別なものかわかりません。

だから、闇と光、清潔と不潔などの両方が必要なのです。両方がペアでセットです。

**失敗を経験するから悟りのためのやる気がでる**

堕落（や、さまざまな失敗）を経験すると、次にどのように進むべきか分かります。いろいろな経験を積むことで「われわれは悟らないと永遠の至福を得ることはできない」と感じ、そのとき人生の目的が悟りであることが理解できます。そして神様は、本当は偉大な存在であることがわかります。そして悟るためのやる気が出ます。さまざまな経験を経ないと、誰も悟りのための努力をしません。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１３～１５**

*それではなぜ、神がそれらをおつくりになったのか。聖者たちをおつくりになるためである。人は、感覚を征服することによって聖者になるのだ。*

（解説）

**神様が闇の部分を作った理由①聖者たちをつくるため**

聖者はいつも喜びに満ちています。苦しみ、悲しみがありません。もしあったとしても、その苦しみ、悲しみが聖者に影響を与えることはありません。　それに対してわれわれには苦しみ、悲しみがいっぱいです。恐れ、混乱、心配ごとでいっぱいです。それらを避けたい、取り除きたいと思っています。われわれの理想像として聖者が存在します。われわれは聖者を見て、「苦しみ、悲しみというものは死ぬまで続くものだと思っていたが、努力すれば超越できるのかもしれない。自分も人生の苦しみ悲しみを超越したい。聖者になりたい」と思い、そのためのやる気が出ます。

もちろん聖者も聖者になる前に努力、奮闘して、聖者になりました。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１５～１７**

*自分の情欲を克服した男にとって、不可能なことがあろうか。彼は、神のによって神を悟ることさえできる。*

（解説）

これは最高の状態です。しかしこの状態になるには、怒りなどをコントロールしないといけません。われわれはこの最高の状態になるために、怒りなどを取り除くことへのやる気が出ます。ヴィディヤー・マーヤー、アヴィディヤー・マーヤーの両方がなぜ必要なのか。アヴィッディイヤー（無知）を取り除くやる気が出ます。それを取り除かないとヴィディヤー（知識）はできません。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１７，１８**

*また、彼の創造のお遊びの全部が、色欲によって永続しているさまを見てごらん。*

（解説）

**神様が闇の部分を作った理由②創造をつづけるため**

シュリー・ラーマクリシュナの言った言葉があります。

シュリスティ　リーラー　　　神の創造（お遊び）は続いています

神様が闇を作ったもう一つの理由は、肉欲（カーマ）です。肉欲がないと、子供ができません。そうすると、神の創造は続かないです。そのために、神様は「家族を作りたい。そのために結婚したい。子供を持ちたい」という意思をわれわれにインプットします。皆さんはその考えは自分の考えだと思っていますが、本当は神様の意思でわれわれの中にその考えが出ているのです。

**家住者は必要な存在**

家住者の存在は必要です。なぜなら、聖者、困った人、貧乏な人、お坊さんなどをサポートする存在が必要だからです。昔はお坊さんだけでなく、学者もお金を稼がず勉強をしていましたので、その方たちのためのサポートも必要でした。

だから、家住者の義務は自分の家族のためだけにあるのではありません。そんなに簡単ではないのです。家住者は、①創造を続ける②さまざまなサポートする、ために必要なのです。

『マハーニルヴァーナ・タントラ』の中に家住者の義務について詳しく書かれてあります**\***。

例えば、盲目の人、病人、老人、子供、赤ちゃん、貧しい人、お坊さん、などは、家住者に頼っています。

**少しでも寄付すると良い結果がでる**

われわれは困った人のお世話をしているという意識がありません。なぜならわれわれは普段、政府に税金を払って、政府がその税金で人々の面倒を見ているからです。われわれは自分の意思で皆さんのためにお金を渡していません。本当は、少しでもいいので自分の意思で困っている人のために寄付をすると、良い結果が出ます。非利己的になるための実践になります。ラーマクリシュナ・ミッションには「全員がお坊さんになることはない。サポートのために良い信者も必要なのだから」という言葉があります。

**\***「家住者は神に献身しなければならない。神を知ることを人生の目標としなければならない。しかも彼は絶えず働いてあらゆる義務を果たさねばならず、その活動の果実はすべて神にささげなければならな　い」　マハーニルヴァーナ・タントラの一節　　　☞（『カルマ・ヨーガ』４５，４６頁）参照

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ１９～２２**

*悪い人びともやはり必要だ。あるとき、ある領地の小作人たちが始末におえなくなった。地主は、ならず者であるゴラク・チョードリーを送らざるをえなかった。彼はじつに苛酷な管理人だったので、小作人たちは彼の名をきいただけで震え上がった。*

（解説）

ここでの「悪い人（wicked man）」というのは、きびしい人（harsh『無情な』）という意味です。管理人と書いてありますが、巡査（officer）のような役目ですね。

**・📖読み『福音』２７頁上段Ｌ２３～下段Ｌ４**

*あらゆるものが必要なのだ。あるときシーターが夫に言った、『ラーマ、アーヨッデャーにある家が全部大邸宅だったら立派でしょうねえ。古い荒れ果てた家がたくさんあります』と。するとラーマが、『しかし、もしすべての家が立派であったら石工たちはどうするだろう』と言ったという（笑い）。*

(解説)

**バランスが必要**

それがヴィディヤー・マーヤーとアヴィディヤー・マーヤーのバランスです。もしみんなが元気だったら、お医者さんの仕事がなくなりますね。だからバランスが必要なのです。

われわれは時々「どうしてこんなにひどいことが起こるのでしょうか」と文句をいっぱい言いますが、ひどいことも起こる理由は、バランスが必要だからなのです。

われわれには選択権があります。だから自分で選んでください。文句を言わないでください。

時々、「神様はこんなにも問題をたくさんおつくりになる。神様の創造はあまりよくない。私ならもっと素晴らしい創造ができるだろうに」とエゴでいう人がいます。その人は闇のない世界を思い描いています。シーターもみんな豊かなほうがいい、と言っていますね。しかし、後で元の状態に戻してください、と言いました。本当はバランスが必要なのです。

**・📖読み『福音』２７頁下段Ｌ４～Ｌ８**

*神はあらゆる種類のものをおつくりになった。*

*は善い木々をおつくりになり、そしてまた毒のある草木もおつくりになった。獣たちの中にも、善いものも悪いものもあり、あらゆる種類の生き物がある―トラ、ライオン、ヘビなどなど」*

（解説）

人間の性格も同じようにさまざまです。われわれは誰のどのような性格を真似し従うかを選ぶことができます。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

Q　&　A

信者「『神のリーラー』というコンセプトは『福音』を読んで初めて知ったんですけれども、それは世界の他の宗教の中でもポピュラーなものなんでしょうか？」

マハーラージ「インドではよくあります。他の宗教にはないかもしれない。インドでは神の遊びのコンセプトはよくあります。バクティ・ヨーガです」

信者「とても素晴らしいな、と」

マハーラージ「そうです。リーラー、神様の遊びのアイデアは、インドでは人気です。神を喜ばせるために、神のお遊びのお供になる。ただ神を喜ばせるためだけに、自分の役割を果たす。困難な時に『大変だ』とも言いません」

信者「その考えがもっと広がったらいいなあ、と思いました」

マハーラージ「それはそんなに簡単なことではありません。リーラーのコンセプトは難しいのです。一般的な信者は困難なことに直面するとすぐに『大変だ』と考えます。神のお遊びのお供をするとは、本当に深く神様を愛し、自分のことは全く顧みず、ただ神様を喜ばせることを目的にすることです。そしてもし深く『私は今、神様の遊びのお供をしている』と考えると、『大変だ』とか『大変でない』という考えが浮かぶことはありません。

人間関係においても、自分のことは全く考えず、ただ相手を喜ばせることが目的の行為がありますね。例えば、お母さんは赤ん坊の面倒を見るとき、自分のことは考えずに赤ん坊の幸せだけを願ってお世話をします。グルと弟子のことを考えてみてください。グルのために自分の快不快にはまったく頓着せずに、ただグルのために奉仕する弟子の話はたくさんあります。それらの関係に神様と自分を重ね合わせるとよく理解できます」

信者「リーラーがそこまで深い意味であることを今、知りました」

マハーラージ「ゲームの参加者が『ゲームから早く上がりたい』というと、おばあさんが『なぜそんなわがままを言うのか』という話が『福音』の中に何度も出てきますね**\***。ゲームが神様のリーラーです。『ゲームを上がりたい』というのは『悟りたい』ということです。母なる神が『オーケー』と言うまで自分では決して『ゲームを上がります』とは言わず、ただ神様を喜ばせることだけを考える。そこまで神への愛を増やさないと難しいです。皆さんの人生の目的は、悟りを得ること、解脱、ですね。しかしほんのわずかな信者にとっての理想的な考えは、神のお遊びのお供をすることです。

信者「リーラーのコンセプトはほかにどこに出ていますか？」

マハーラージ「バーガヴァタムの中に、シュリー・クリシュナのリーラーが出ています。ほかにもバクティの聖典に出ています。マザー・カーリーのリーラー、シュリー・クリシュナのリーラー、ラーマのリーラーなどがあります。ラーマのリーラーの祭りがインドであります。クリシュナのリーラーの祭りもあります。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

**\***：ハリ「なぜ、この世にはこんなに多くの苦しみがあるのでしょうか」

師「この世は神のお遊び（リーラー）だ。それはゲームのようなもの。このゲームには喜びと悲しみがあり、美徳と悪徳があり、知識と無知があり、善と悪がある。もし創造から罪や苦しみが全部除かれたら、ゲームは続かないだろう。

　かくれんぼ遊びでは、自由になるためには『おばあさん』にさわらなければならない。しかしはじまったばかりにさわられたら、『おばあさん』は喜ばないのだ。しばらくのあいだ遊びをつづける、というの　が神のだ。それから―

　　　百千のの中のせいぜい一つか二つが、糸が切れて飛ぶ。

　　　するとあなたはそれらを眺め、笑って手をおたたきになる、

　　　おおよ。　　　　　　☞（『福音』４２２頁上段Ｌ１６～下段Ｌ５参照）

（第５１回『福音』勉強会）以上